

P-272

当院リハビリテーション科におけるスキンテアの現状と対策

那須赤十字病院 リハビリテーション科部

○荒井 秀彰、池澤 里香、吉田 祐文

【はじめに】当院ではリハビリテーション介入時にスキンテアが少なからず発生しているが、具体的な対策がなされていない。そこで過去のインシデント・アクシデントレポートから発生状況や原因を整理し、当院に合わせたスキンテア予防のアルゴリズム化を検討することにした。

【方法】2013年4月1日から2017年3月31日までのスキンテア発生状況、受傷機転、損傷部位、危険因子を分析した。

【結果】レポート総数102件中スキンテアの発生は14件、発生状況は乗移8件、起居動作訓練4件、歩行訓練1件、体位変換1件であった。損傷部位は下腿7件、上腕2件、手背2件、頬2件、足部1件。受傷機転は車いすや訓練器具との接触10件、介助者との接触2件、ベッドとの摩擦1件、不明1件であった。また、危険因子として環境調整の過誤12件、介助方法の過誤9件、肌露出部保護の不実施7件、皮膚状態の未評価2件であった。

【考察】当科でのスキンテアは、乗移時に下腿が車いすのフットサポートと接触して起こることが多いことが分かった。また危険因子として車いすの選定やベッドの高さ、人員の配置などの適切な環境調整・介助方法の検討がされていないこと、肌の露出部位の保護を怠ったことが多かった。いずれのケースについても具体的な皮膚脆弱性の評価を行っていないことが分かり、皮膚の状態に合わせた環境調整や肌の保護の方法を選択できないのではないかと考えた。今後は日本創傷・オストミー・失禁管理学会で提示している「スキンテアの予防と管理のアルゴリズム」を基にリスクアセスメントを行い、「フレードンスケールによる褥瘡ケアアルゴリズム」を参考に外力保護ケア、スキンテアの方法を検討していくことが課題である。

P-274

褥瘡対策委員会におけるリハビリテーション科の役割と院内発生褥瘡について

福岡赤十字病院 リハビリテーション科¹⁾、福岡赤十字病院 看護部²⁾

○生田 淳史¹⁾、大塚 則男¹⁾、堺 和生¹⁾、岩倉 将¹⁾、石井美紀子²⁾

【はじめに】当院の褥瘡対策委員会（以下、委員会）は平成16年度に発足し、現在皮膚科医、整形外科医、形成外科医、皮膚・排泄ケア認定看護師、理学・作業療法士、薬剤師、管理栄養士、事務職員等多職種で構成されている。今回委員会におけるリハビリテーション科（以下、リハ科）の役割と併せて過去3年間の院内発生褥瘡の現状について報告する。

【リハ科の役割】委員会の活動は毎週の褥瘡回診を中心に、体圧分散寝具全床導入、適切な薬物療法や栄養管理など専門性を活かした褥瘡予防対策、治療に取り組んでいる。リハ科としては、リハビリ介入、褥瘡セミナーの開催、体圧分散寝具選択フォーチャート作成、体位変換用具、ポジショニングクッションの整備や使用方法の周知、簡易体圧測定器を用いて圧を可視化したポジショニング表の作成、術中体位の指導に携わってきた。

【院内発生褥瘡の現状】平成26年度から平成28年度における院内褥瘡発生件数及び褥瘡推定発生率（以下、発生率）、部位について後方視的に調査した。高、多発褥瘡の方は、最も深い褥瘡部位とした。件数は平成26年度43件、平成27年度33件、平成28年度35件で、最も多い発生率の年度で0.22%であった。部位は仙骨部が約4割で最も多くみられた。

【まとめ】日本褥瘡学会実態調査委員会が平成24年度に報告した全国調査の結果によると、一般病院における発生率は1.6%であった。当院の発生率は全国の平均値を下回っており、これは委員会が取り組んでいる活動の成果と考えられる。今後発生率の低下を図るため、多職種と情報共有を徹底し、患者の病態を把握し、個々の身体機能・褥瘡状態に合わせたポジショニングや環境の評価を行うことで、リハ科の役割を担っていきたい。

P-276

腱板修復術後患者に対する取り組み—院内および地域との連携—

伊勢赤十字病院 医療技術部リハビリテーション課¹⁾、同 整形外科²⁾

○山口 陽平¹⁾、堀口 育代¹⁾、中垣 美保¹⁾、戸神 美佳¹⁾、奥野 麻衣¹⁾、濱口 大輔¹⁾、西本 和人²⁾、森川 丞二²⁾

【緒言】当課では、地域連携をより密に行うために、退院先へスタッフを派遣する「出張リハ」を行っている。このシステムにより、筆者は地域でリハビリを完結させた腱板修復術後の一症例を経験した。また、これまで腱板修復術後のリハビリプログラムや日常生活動作指導プリント、病棟スタッフ指導用動画の作成など、各部署で連携した取り組みを行ってきており、平均入院日数は短縮傾向である。今回は、これらの取り組みを対象者同意のもと報告する。

【症例】70代女性。MRIにて棘上筋、棘下筋の断裂をみとめた。術前、自動ROM肩屈曲45°、外転50°、MMT肩屈曲2、JOAスコア50.5点。直視下にて腱板縫合術を施行されたが、腱板の脆弱性があり、再断裂のリスクが高い状態であった。術後2日、リハビリ開始。術後28日、他病院へ転院となった。転院翌日、「出張リハ」の依頼があり、筆者が転院先を訪問して、プロトコルの共有等詳細な申し送りを行った。その後、1週ごとに電話などにより状態を確認。術後58日、自宅退院となり、外来リハビリは転院先にて、また当院受診時に状態確認を行った。術後123日、再断裂の臨床症状はみとめず、ROM、筋力、JOAスコアの改善がみられ、リハビリ終了となった。

【考察】「出張リハ」によって、より詳細な申し送りを行うことで、シムレスで効果的なリハビリを行うことができたと考えられる。申し送りの際には、作成したプロトコルや指導プリントにより、訓練のポイントや注意点を的確に伝えることができた。これらの取り組みは医師・看護師・地域スタッフとの連携をより深めることにつながったと考えている。

P-273

災害リハ研修の広報と内容の検討 —アンケートを振り返って—

京都第一赤十字病院 リハビリテーション科

○加藤 大策

【目的】熊本地震以後ここ数年、都道府県レベルでの災害リハ研修も多く開かれるようになった。しかし、学校教育で触れる機会も少なく、J R A T活動を知らないセラピストが多い現状がある。今回、研修後アンケート調査を基に、広報と内容のあり方について一助となるべく報告する。

【方法】研修内容は、テーブルワーク中心に災害時活動の注意点、ストレスケア、出勤準備、避難所評価、HUGなどを実施した。H28年度京都府理学療法士会主催医療者向け災害リハ研修に参加した20名を対象に、書面アンケートを実施した。

【結果】有効回答は、20名中18名であった。参加者の経験年数は、5年目まで27.7%、14年目まで16.6%、15年目以上が55.5%。過去の災害関連研修受講歴は、0回61.1%、3回未満22.2%、3回以上16.6%。本研修を何らかに見聞きしたかに関しては、士会ホームページ3名、士会広報誌4名、府士会FAX4名、災害リハ関連会議告知3名、SNS2名、その他2名であった。次回以降災害研修受講歴は、参加したい72.2%、やや参加したい27.7%、どちらともいえない〜参加したくない0.0%であった。また特記事項記入欄記入者は9名であり、「グループワークが多くて良かった」4名、「HUGが行えて良かった」5名であった。

【考察】広報のあり方に関しては、情報源は分かれており、今後も広く多様な方法での発信が欠かせない。また参加者の経験年数を比較すると、経験年数の浅いセラピストの参加が少なかった。今後、新人プログラム研修など他の士会研修時に告知し周知させることが必要である。また、研修内容に関しては、過去の受講歴に関係なく、グループワーク中心の参加型研修で良い評価を得られた。

P-275

大規模災害に備えて リハ関連職種が協働してアセスメントシートを作成して

松山赤十字病院 リハビリテーション科

○伊東 孝洋、和田 周二、定松 修一

【目的】震災直後の救命救急に引き続き、できるだけ早期に被災者に対してリハビリテーションによる生活支援等をリハ関連職が連携して実施し、生活不活発病等の災害関連死を防ぐとともに、生活再建に向けた活動を行うことを目的として、愛媛県内リハ関連団体が協力して愛媛県災害リハビリテーション連絡協議会が結成された。今回リハ関連職種が協働して災害時に活用できる共通のアセスメントシートを作成したので報告する。【アセスメントシートの紹介】愛媛県内の医療・介護・福祉団体の災害担当者が協議して、避難所環境調整アセスメントシートと要配慮者用アセスメントシートを作成した。避難所環境調整アセスメントシートは避難所において、要配慮者に対して適切な対応がなされているのか評価するとともに、避難所内において寝・食・排泄・清潔の分離がなされているのか評価を行い、その情報を行政担当者や保健師等と情報共有ができるよう作成した。要配慮者用アセスメントシートはリハ的な関わりが必要によって被災者を選別し、必要があれば福祉避難所への入所を検討するよう関係者へ働きを行うことを目的として作成した。【考察】リハ関連職種が共通のアセスメントシートを用いて評価を行うことにより、関係機関や多職種が連携を取りながら活動を行うことができ、情報の共有を容易に図ることができる。愛媛県災害リハビリテーション連絡協議会は年1回開催される県総合防災訓練に参加・協力を行っており、県総合防災訓練ではリハ関連職種が実際にアセスメントシートを用いて評価を行っている。今後アセスメントシートにおいて問題点や改善すべき点がないか検討を行い、定期的にアセスメントシートの見直しを行う予定である。

P-277

看護学生の災害看護演習の効果—チームで協働する重要性の理解

石巻赤十字看護専門学校 看護学科

○安倍 藤子

目的：平成28年度災害看護演習で、学生にチームで協働する重要性を理解させるため、1. 傷病者の特性（傷病の時間経過による変化も含む）を考慮した演習、2. 災害時の救護基礎技術演習、3. 想定災害看護演習の実際とその結果報告会を行った。3つの演習を終えて、学生がチームで協働する重要性をどのように理解したのかをまとめた。方法：3年生38名に対し、「演習参加による一番の収穫」「演習参加後の気持ちの変化」「今後の訓練参加希望の有無」「その他」を自由記載させた。記載内容をカテゴリ化し比較分析した。学生には、演習成果として報告する目的と、賛同の意思がなくても学業や成績等に一切関係するものではないことを口頭で説明し、同意書のあったもののみ結果として抽出した。成績：有効回答数35名。演習の一番の収穫に、「他チームとの連携やチームワークで協働することが重要だと感じた」（10名）「平時の訓練の重要性がわかった」（9名）「日頃の基礎知識・技術の積み重ねが重要だ」「計画通りにいかないことの突発」をあげた。演習に参加し気持ちの変化があったことに、「日々の学びの積み重ねが災害時の対応にもつながる」「全体を調整的に見る人の重要性」「細やかな配慮の必要性」をさらに実感したことをあげた。今後、病院等の救護訓練に参加した際には、33名がはいと答えた。その理由は、「いざという時に適切に動ける人になりたい」（13名）「日頃から備えをしておく必要があるから」をあげた。結論：学生は、災害現場においては、他者との協働が重要で、協働して動くことができるようになるためには、自分の役割として日頃から基礎知識・技術をしっかりと身につけることが大事だと実感したと言える。また、計画通りにはいかないことが多く、だからこそ日頃から準備してチームの協働に備える重要性を学んだと言える。